特集

変わる景色、広がる未来
ボートレース桐生の「今」

「ボートレース桐生」と聞いて、どのようなイメージを思い浮かべるだろうか。ギャンブル、近寄りがたい、男性客が多い――。そんなイメージを持つ人も、少なくないかもしれない。

しかし、時代の移り変わりとともに、その姿も少しずつ変わってきた。かつてのイメージからは想像できない、新たな景色が広がっている。

今年、開設70周年を迎えるボートレース桐生。長い歴史の中で変化を重ね、今、さらに新しい時代へと歩みを進めている。今号では、変わり続けるボートレース桐生の「今」を特集する。

知っているようで知らない
ボートレース桐生の素顔

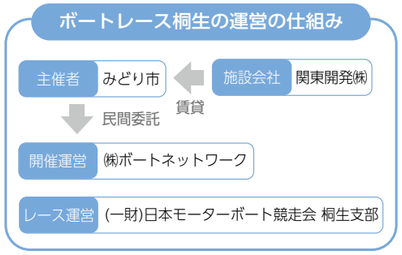
ボートレース桐生とは、どのような施設なのだろうか。名前はよく知られていても、その歴史や誕生の背景、施設の特徴まで知る人は意外と少ないかもしれない。ここでは、知っているようで知らないボートレース桐生を紹介する。

みどり市笠懸町にあるボートレース桐生が主催者となってレースを開催しているボートレース場だ。ボートレースは、6艇のモーターボートが1周600㍍の競走水面を3周して着順を競う競技で、競馬、競輪、オートレースと並ぶ公営競技の一つである。以前は競艇と呼ばれていたが、現在はボートレースという呼び方に変わった。スポーツとしての魅力やエンターテインメント性を打ち出し、より幅広い世代に親しんでもらうことが狙いだ。

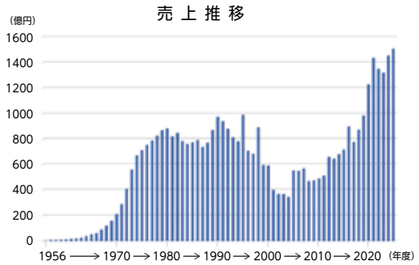
今年開設70周年を迎えるボートレース場の中で最も新しいボートレース場として、1956年11月8日、風光明媚な阿左美沼を舞台に初開催を迎えた。開設の背景には、財政難に直面していた笠懸村が新たな財源を求めていたことに加え、競走に適した水面と発達した鉄道網が整っていたことがあった。

最も遅く開場したボートレース場であったが、その後は時代に先駆ける取り組みを次々と打ち出してきた。近年はナイターレースの開催やネット投票の普及などにより、売上は好調を維持している。

ボートレース桐生の運営の仕組み



売上推移



業界初

ナイターレースの開催

1997年

仕事終わりに夕方から夜遅くまでレースを楽しめるように実施

業界初

民間委託方式の導入

2004年

主催者が売上変動のリスクを負わずに一定額の安定した収益を確保

業界初

ナイター用照明のLED化

2014年

消費電力を50％以上削減して省エネに貢献

ボートレース桐生の
昔 と 今

ボートレース桐生で来場者と向き合い続けてきたベテラン従業員に、昔と今の変化を聞いた。

かつての荒れた場内の記憶

「入社した頃は、ボートレース場で働いていることを周囲に話すのに、少し抵抗がありました」

そう振り返るのは、32年にわたりボートレース桐生に勤める小長谷幸子さんだ。主に接客を担当し、今では顔なじみの常連客も多い。

小長谷さんの記憶にあるかつてのボートレース桐生は、薄暗く、ごみが散乱し、荒れた雰囲気が漂っていた。時には怒号が飛び交い、けんかが起きることもあったという。

明るく親しみやすい施設へ

こうした状況を変えるため、現場では地道な改善が重ねられた。コンクリート壁を明るいデザインに一新し、ガラス張りを増やして自然光が差し込む開放的なフロアへと改装した。清掃にも力を入れ、社員一丸となってきれいで親しみやすいボートレース場づくりを進めてきた。

接客のスタイルも変わった。来場者を「ゲスト」、スタッフを「キャスト」と呼び、先回りした声掛けを徹底するなど、「また来たい」と思ってもらえる接客を心がけた。

変わる来場者の顔触れ

変化は客層にも表れている。

「かつては男性客が中心でしたが、ここ数年で、若者や家族連れ、女性、カップルなど、以前はあまり見られなかった層の来場が増えてきたと感じています」

その背景には、イベントやテレビCMの効果に加え、近年は若手ボートレーサーの人気も追い風となっている。好きな選手を応援する「推し活」を楽しむファンも増えた。

中でも小長谷さんが大きな変化だと感じているのは、「賭けないお客さん」が増えたことだ。レースをスポーツ観戦のように楽しむ人や、イベントを目当てに訪れる家族連れなど、楽しみ方は多様化している。来場者の層が広がるにつれ、場内の雰囲気も明るくなってきた。

「今では、どこで働いているのかと聞かれても『ボートレース桐生で働いているよ。ぜひ遊びに来てね』と胸を張って言えるようになりました」と晴れやかな笑顔で話す。

＼ 常連のお客さんに聞きました ／

小沼均さん

昔は鉢巻きをしたおじさんばかりで、場内にはごみやたばこが捨てられていて不衛生な印象がありました。それが今では、見違えるほどきれいで快適になりましたね。雰囲気も明るくなり、子どもの姿も増えました。

ボートレース場に広がる新しい景色

埼玉県から訪れた配島さん一家は父親はレース、娘は室内遊び場、息子はVRゲームと、それぞれの目当てを楽しんでいる。母親は子どもたちを見守りながら、ゆったりとした時間を過ごす。家族で訪れても、楽しみ方は一つではない。それぞれが思い思いの時間を過ごす姿が、今のボートレース桐生には広がっている。

100円で遊び放題

室内遊び場は、雨の日も暑い日も安心して遊べるのが魅力だ。滑り台やボールプールを備えた3階建てのジャングルジムのほか、ままごとやゲーム、漫画などもそろい、子どもたちは飽きることなく楽しめる。

屋外の芝生広場も、子どもたちにとって格好の遊び場だ。無料で借りられる遊具で思い切り体を動かしている。遊びに夢中になるうちに、気づけば一人また一人と子どもたちが加わり、自然と新たな輪が生まれている。水面から少し離れた場所では、レースとはまた違ったのびやかな時間が流れている。

VRでボートレース体験

VRを使ったボートレース体験も人気だ。ゲーム感覚でスピード感や操縦の難しさを味わえるのが魅力。

太田市から訪れた小学6年生の町田遥斗さんは、VRゲームの開催日には毎日通うほどの熱中ぶり。通い続けるうちに同世代の仲間も増え、今では互いに競い合うよきライバルとなった。全国ランキング上位を目指し、仲間と腕を磨きながら記録更新に挑戦している。

ボートレース観戦も大好きで、「将来はボートレースに関わる仕事がしたい」と目を輝かせる。

イベントで地域開放

週末には子ども向けのイベントなどが開催され、会場には多くの家族連れが訪れる。子どもたちはさまざまな催しを楽しみながら、元気いっぱいの笑顔を見せている。

また、2022年からは「みどり市笠懸まつり」の会場にもなり、当日は多くの人でにぎわう。会場内には子どもたちの笑顔や歓声が広がり、普段のレースとはまた違った熱気に包まれる。

ボートレース桐生には、レースだけではない新しい景色が広がっている。

ボートレース桐生・
みどモスストリートパーク

時　間　8：30～20：30
休場日　場外発売場の休場日
(年間10日程度)
料　金　無料
予　約　不要

ここから始まる、夢への挑戦

場内の楽しみ方が多様化する中、ボートレース場の新しい姿は、場外にも広がりを見せている。

地域に開かれた場所を目指して複合アミューズメント施設へと進化させる「ボートレースパーク化」の取り組みが進んでいる。その第一歩として、スケートボード場と3×3バスケットボールコートを備えた「ボートレース桐生・みどモスストリートパーク」が令和7年1月にオープンした。週末や放課後になると、ボードが路面を滑る音やボールを弾ませる音が響き、子どもたちや若者の活気にあふれている。

ここから広がる、新たな輪

スケートボード場では月1回、小・中学生向けの教室が開かれる。毎回すぐに定員に達するほどの人気で、参加者はレベルに応じた指導を受けながら練習に励んでいる。

藤岡市から通う福島さん兄弟は、「各地のパークに行くが、ここが一番広くてお気に入り。滑りやすくて最高に楽しい」と声を弾ませる。

競技を始めたきっかけは、東京オリンピックで躍動した選手たちへの憧れだ。「いつか自分もオリンピックに出たい」と目を輝かせる。

この場所から世界へ羽ばたくオリンピアンが誕生する日は、そう遠くないかもしれない。

太田市から訪れた小林さん兄弟は毎週ストリートパークに通う常連だ。同じく常連の今泉さん4姉弟と自然と打ち解け、今では一緒に遊ぶ仲になった。偶然の出会いが交流へと発展するこの場所で、この日も新たなつながりが生まれていた。

きっかけは、近くでバスケットボールをしていた中学生たちに「3対3をしませんか」と声をかけたこと。初対面ながら快く誘いに応じた中学生たちとゲームを楽しんだ。ナイスプレーには拍手や歓声が上がり、合間には会話も弾んだ。スポーツを通じて、新たな輪が広がった。

ストリートパークは、単にスポーツを楽しむだけでなく、人と人をつなぐ地域の拠点となっている。年齢や地域を超えた交流が生まれ、何気ない声掛けが新たな仲間との出会いにつながる。これからも、多くの人が集い、新たなコミュニティを育む場所となっていきそうだ。

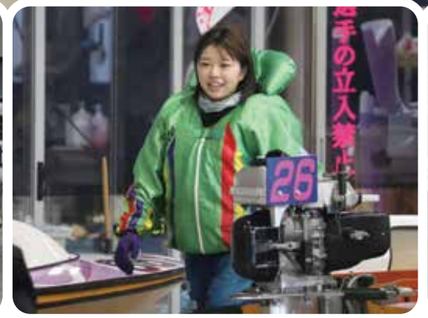
水面に舞う 未来の風

水面を駆けるボートレーサーにも、若い世代や女性の存在感が増している。今回、群馬支部に所属する若き２人にボートレース桐生の魅力や地域への思いを聞いた。

あの日の感動を 今度は私が届ける

高橋 涼夏（たかはし すずか） さん（19）

前橋市大胡町出身。小学校から高校までソフトテニスに打ち込む。高校１年生でボートレーサー養成所に入所。2024年11月にデビューし、2026年６月に初勝利を挙げる。趣味は音楽鑑賞、歌うこと、書道。好きな食べ物は煮卵。



いとこ・関浩哉選手

地元の風を力に 未来へ駆ける

大澤 風葵（おおさわ ふうき） さん（25）

みどり市大間々町出身。小学校から高校までサッカーに打ち込む。2020年５月にデビュー。2022年６月に初優勝を果たし、2023年には最優秀新人選手に選ばれる。趣味は映画、スポーツ、旅行、コーヒー。好きな食べ物は寿司。

父・大澤普司選手

ーボートレーサーを目指したきっかけは

高校2年生の時、父が現役ボートレーサーということもあり、卒業後の進路として頭に浮かびました。元々スポーツが好きだったことも大きいです。

ーボートレース桐生の魅力は

全国に7場しかないナイターレース開催のボートレース場であることに加え、冬から春にかけて吹く「赤城おろし」という強い追い風が魅力です。そうした環境の中で行われるレースは、見ていて迫力があると思います。風によって水面の状況も変わるので、ボートレース桐生ならではのレースの面白さがあります。

ー子どもや若い世代の来場が増えていることをどう感じるか

幅広い世代の方に来場いただけるようになり、とてもうれしいです。特に、スケートボードとバスケットボールができる「ボートレース桐生・みどモストリートパーク」ができたことで、若い世代の方にも足を運んでいただく機会が増えたのは、とても良いことだと思います。以前に比べて、ボートレース場に対するイメージも少しずつ変わってきているように感じます。ボートレースがより多くの方にとって身近なものになることで、ボートレーサーという職業も、より誇りを持てる職業になってきたと思います。

ー地元の好きな場所は

普段はレースや遠征で忙しいので、実家に帰って地元のラーメンを食べたり、けさかけ橋や小中大滝などの自然を満喫したりすると、リフレッシュできます。

ー市民に伝えたいことは

全国に24場しかないボートレース場が身近にあることを知ってもらいたいです。まだ訪れたことのない市民の方にも、ぜひ一度足を運んでレースを見ていただけたらうれしいです。

ーボートレーサーを目指したきっかけは

小学1年生の時、いとこの関浩哉さんがボートレーサーになりました。デビュー戦をボートレース桐生で観戦し、迫力あるモーター音と水しぶきに感動しました。その後、レース観戦や実際にボートへ乗せてもらった経験を通して、次第にボートレーサーに憧れるようになりました。

ーボートレース桐生の魅力は

自然豊かな環境の中でレースを楽しめるところや、ナイターレースで昼間とは違った雰囲気を楽しめるところが魅力です。また、地域の方々との距離が近いところも魅力です。

ー子どもや若い世代の来場が増えていることをどう感じるか

子どもや若い世代の方にボートレースを知ってもらえるのは、とてもうれしいです。私自身も、同世代の方々にボートレースをもっと身近に感じてもらえるような選手になりたいです。

ーファンとの交流はあるか

レースを見に来てくださった方から声をかけていただいたり、「応援しているよ」と言っていただいたりすると、自分の走りを楽しみにしてくれている方がいることを実感し、とても励みになります。また、サイン入りグッズを出品するイベントなどで直接お会いできる機会もあり、皆さんと交流できることをうれしく感じます。

ーボートレース桐生がどんな場所になってほしいか

ボートレースを知らない方にも気軽に訪れていただき、子どもから大人まで、家族や友人と楽しく過ごせる場所になってほしいです。レースを見るだけでなく、地域の方々が気軽に楽しめる場所として、より多くの方に「ボートレース桐生に行ってみたい」と思ってもらえたらうれしいです。

収益金を子どもたちの笑顔と未来のために活用

時代と共に進化を続けてきたボートレース桐生。売り上げの中から払戻金や経費などを差し引いて市に納められる収益金は、道路の整備や公共施設の建設など、私たちの暮らしを支える大切な財源として活用されている。令和６年６月には、収益金を活用して「こども未来基金」を設置。結婚から出産、子育て、教育まで、切れ目のない支援を充実させ、子どもたちの健やかな成長と明るい未来を支えている。

保育料が無料

保育園などに通う子どもの保育料が無料

給食費が無料

保育園などから中学校までの約12年間の給食費が無料

給付型奨学金を新設

大学生などの夢の実現を応援するため夢未来奨学金を支給

体育館にエアコン設置

市内の小・中・義務教育学校の体育館にエアコンを設置

こどもの居場所を設置 屋内遊び場を整備

こどもの居場所「みどもスプラザ」を設置。また、天候に左右されずに遊べる施設を整備中

タブレット端末を配布

市内の小・中・義務教育学校の児童・生徒全員に１人１台新しいタブレット端末を配布

みどり市笠懸まつり（ボートレース桐生）

未来へ向けて走り続ける――

70年の歴史を重ね、地域に開かれた場所へと進化を続けてきたボートレース桐生。かつて大人たちがレースに熱狂する空間だったこの場所に、今、子どもたちの歓声が響き、家族の笑顔が広がっている。世代や目的の異なる人々が集い、それぞれの時間を過ごす中で、新たな出会いとつながりが生まれている。

水面を駆け抜ける6艇のボート。その先にあるのは、勝敗だけではない。地域の未来を支え、次の世代の夢を育み、まだ見ぬ可能性を切り拓く力だ。

人が集まり、出会いが生まれ、未来が動き出す。ボートレース桐生は、積み重ねてきた70年を力に変え、地域の未来を乗せてこれからも走り続ける――。